

T000

船舶運送會史
(前編) 上

昭和二二、六

昭和二二、六

船舶運送會史
(前編) 上

船舶運送會

防衛庁防衛研究所図書館



0002

8000

業務用

船舶運營會史

(前編)

上

昭和二十二年六月

船舶運營會

1000

○本書は船舶運營會内相互間に於る業務連絡上の參考資料として作製したものである。

○従て本書の外部への持出し其他の取扱に付ては特に慎重を期せられ度い。

5000

昭和二十二年六月

昭和二十二年六月

船舶運營會々史

(前編) 上

業務用

船舶運營會

序

我國海運統制は支那事變勃發以來時局の變遷に即應し屢次に巨り改竄強化の道程を經歷し遂に戰時海運管理令により特殊法人たる本會の創立となり、國家使用船舶の一元運営に迅速展し更に太平洋戰爭の末期には海運總監部によるA・B・C船綜合運営の段階に突入した、而て戰時中は本會を中心として海上輸送力増強に關し凡ゆる施策が行はれたのであるが戰局不利の大勢には抗すべくもなく我海運は潰滅的打撃を受け戰前約六百三十万總屯の商船隊を保有し世界第三位の海運國として七洋に雄飛した、我海運の終戰時に於ける船腹總量は戰前の半以下の約百四十万總屯（航海不能船約五十万總屯を含む）となり而も大半は戰時中急造組立の戰標船と殘存せる在來船も老朽遲足の劣惡船を全とするに至つた、太平洋戰爭が我海運の上に招來した慘禍は實に甚大深刻にして想ふに過ぐるものがある、戰時中海運關係は機密として一切發表を許されず而も本會各地支部出張所の多數は戰禍に罹り資料を焼失し本部亦戰爭末期に於ける救済の事務所疎開等匆忙の際書類の混淆・紛失等の爲め戰時海運の實體把握は漸く困難化するに至つたが、戰時海運管理令の中核実行機關として船舶需管會が戰時中歩んだ眞の姿を虚飾なく描寫せしめ本會事務處理上の參考並に今後の本邦海運界の參考資料として保存し置く事は本會の義務と信じ之が歴史編纂の專任者な任命し本會創立後終戰迄の期間を前編として記録せしむる事とした、

戰後性格を一變し C・M・M・C (Civilian Merchant Marine Committee) として UICAJAP (Shipping Control Authority for Japanese Merchant Marine) として配下に戦後處理の一環たる海運輸送と我國平和海運再建の爲め出發せる本會の業績は後

編として受めて稿を起さす事とした。

今や前篇の稿成りて、戦時海運の跡を顧みるに海上輸送力増強の爲め拂はれた一切の努力が平和目的に指向されたりしならば世界海運の進展と人類文化向上に奇異するところ蓋し絶大なものがあつたと想はれる。

我國は曩にボツダム宣言を受諾し既に新憲法の公布実施を見世界に比類なき戦争の完全放棄により徹底せる平和民主主義國家として新發定せる時我國將來の進運は生産増強による貿易の再開と之を補助育成すべき我海運の健全なる發達に俟たねはならない。

此の秋に當り本書が古きを顧みて今を考ふるの資ともならば蓋し編纂の趣旨空しからずと信ずる次第である。

昭和廿二年六月

船舶運營會

理事長 柳 瀬

省 吾

追記

本史編纂に當りては元本會理事島崎龍治氏の綿密なる監修を煩はした事は感謝に堪えない。

又總務部長理事小野六郎氏、今次長瀬藤明氏、輸送部長理事渡辺一良氏、今次長有吉義彌氏、船員部長理事大久保富吾氏、工務部長理事加藤翠氏、經理部長南通次氏並に元本會理事丸山直次氏、元本會管理部長一井保造氏等より懇切なる助言ありたるに對し深甚の謝意を表する。

尚本稿の編輯に當り編輯擔任者事務處理上多大の便宜を與えられたる左の専門委員諸氏の勞を多とする。

専門委員

中西久・西田憲臣・湯河勇・幸崎磊三・原田耕太郎・石黒敬修・森嶋武・川勝栄・三輪謙次郎・井上嘉瑞・坂田翠・葛西喜一・眞殿益起・亀掛川不二夫・大隅佳一・石田良一・土井由之・山田砥三・西川信雄・星崎欣三・高木孫四郎・片岡武夫・伊藤秀治・野村賢一・土岐廣・関八重郎・稻垣弘・根中参・小林葛毫・阪本卯工門・源馬喜久・岸井孝久・成瀬耐一・林征次

又左記の中村主任以下の編輯擔任者は其の全力を傾倒せられ本業務遂行せられたる眞摯なる努力に對しては茲に特筆して其の功績を稱し以て深甚の謝意を表する。

編輯擔任者

中村徳三郎・長崎烈男・牛塚一郎・高梨正夫・村上壽助・柴田康彦

以上

01

第3表④保有汽船の艘使用先別推移表

⑤ C 船の艘推移表

第11表 C 貨物船の型別対比 (19.8.3現在)

第11~14表物動関係

第16表 油槽船の艘推移表

第18表 甲造船の艘竣工実績表 (p237)

第21表 喪失船艘一覧表 (p247)

第22表 拿捕船経外口停船増加表 (p251)

(23 × 15)